



114
A 784



關係ニ就キ清帝ヘノ奏議
マークイヌ、チエンヘノ命令

露清約定ノ性質
清國好戦ノ状態

(上海「クローリール」新聞ヨリ抄譯ス)

次條ノ文ハ北京ヨリ来タル支那新聞ニ記載スル
モノニシテ其利害ニ関スルヤ大ナリ文体ハ奏議
ノ体裁ナレド在倫敦支公使「マークイヌ、チエン」ヘ
近頃支那政府ヨリ其公書ニ添テ送致ヤシモノヲ
リ而シテ今回約定ニ就テ詳カニ支那政府ノ意見
ヲ含ミ實ニ此公使ノ露都聖彼得堡ニ於テ露政府
トノ商議ニ當テ其採用スヘキ方向トシテ與ヘラ

峯源次郎 譯

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄附

1137



レタル命令ナリ且ツ文末ニ崇厚氏ノ結締シタル
約定ノ要旨ヲ付セリ

侍讀「チヤン、チ、ツ」謹テ書ヲ皇帝陛下ニ上シテ結締シ
タル約定ノ廢止ト且ツ彼カ凌辱ニ向テ自カラ保護スル
ノ方法ヲ決定セントス故ニ臣謹テ此約定ノ為ニ發起ス
ルノ利害得失ヲ指擧陳説ス其言ノ激烈ニ亘ルアルモ顧
ミサルナリ一ニ我カ皇帝陛下ノ聖覽ヲ賜ハ、幸甚
臣近日發兌ノ北京新聞ヲ閱シテ我使節ノ露國トノ約定
ニ就テ其破廉恥ノ行為多ク我國勢ヲシテ危險ノ地ニ處
スルノ行為アリタルカ故ニ皇帝赫怒シテ要路ノ頭官ヲ
召集スルノ詔ヲ下シ玉ヘルヲ見タリ臣カ此約定ニ付テ
聞知スル所ノモノハ固ヨリ道路ノ風説ニシテ唯々概畧
ニ過キサルノミ然レモ臣カ最モ深キ悲憤慷慨ヲ發スル

ニハ猶ホ餘リアルナリ

此約定ノ批准ト拒絕ハ利害ノ由テ判スル所ナルカ故ニ
臣今マ謹テ太后皇帝陛下ニ歎願ス

概シテ新約定ノ十八ヶ条中ニハ一ヶ条ノ我國ニ利アル
モノヲ記セズ就中其最悪点ハ別々嘉峪関ヨリ西安及ヒ

漢中ヲ經テ漢口此ノ線路ニ由テ支那ノ為ニ最要地ナル
秦隴并ニ荊楚上游ノ州郡悉ク彼レニ渡サル、ト云ヘリ

ニ至ル陸路貿易ノ論題ナリ是レ最モ注意ヲ要スヘキ所
ナリ此各地ニ於テ日々貿易ノ場所増加シテ恰モ雜草ノ

茲ニ繁茂スルカ如シ故ニ中國ノ事情尽ク漏泄シ何事ニ
テモ秘匿スルヲ得ルモノナシ而シテ此ノ國境ニ於ケル

要衝ノ路ハ陸分防禦アレモ國ノ内部ハ既ニ失ヒシモノ
ノ如シ是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第一ニシテ

最要点ナリ

我カ太祖創業ノ地ナル東三ヶ國(ベールン、キヤンキン、フエンチン)又吉林ノ最要地ニシテ奇麗ノ場所ナル伯都約ノ事ニ関シテハ若シ露人ニ許スニ其船ヲ以テ伯都約ニ近接スルヲ許可セハ東三ヶ國モ亦タ滿地露人ノ隨意ニ近接スル所トナルヘシ右ノ如クナレハ今日ヨリ北京ハ露人ノ近接スル所トナルヘシ而シテ支那ハ漸々今日ノ性質ヲ交換スヘシ但シ支那ハ何ノ故ニ自カラ奮テ綏汾ヨリ西方二千里(里ハ支那ノ里ニ程ナ)ノ地方ニ推シ反サ、ルヘキノ理由ナキ乎猶ホ又タ内國ノ河流ニ於ケル航海ニ關係シテハ他ノ外國政府カ既ニ其特權ヲ請求シタレバ其願ヲ得サリシ然ルニ若シ此特權ヲ以テ露ニ付與セハ自餘ノ外國皆ナ此ノ例ヲ舉テ其請ヲ所ヲ達セン

トスヘシ是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第二

我カ政府此貿易社會ノ利益ノ為ニ課稅ヲ廢止スルヲハ此利益今日若シ擴充シテ蒙古内外諸種族ノ人民及ヒ同盟人(内蒙古ヲ分ツテ六盟トス又タ)等ニ及ハ、今後露人ハ其貿易ノ為ニ此利ヲ占有シ目カラ免稅ノ思想ヲ為スヘシ而シテ是レカ為ニ支那人ノ手ニ於ケル貿易ノ漸々衰頹スヘキハ勿論ナレバ他ノ弊害ニ比スレハ實ニ小事ナリ是レ我カ蒙古人ハ既ニ貧弱ナルニ露人其四方ヲ環圍シ新民ヲ虛掠スヘシ且ツ新疆ニ於ケル陣役ノ巨大ナル費用ハ總テ露人ノ利徳ノミニ歸スルノ思考スレバ彼ノ貿易衰頹ハ實ニ小事ナリ張家口及ヒ其他如キ内部ニ於ケル場ニ就テ思考ヲ下スニ此等ノ地ニハ露國ノ商社設立シ其效漸々增長シ其營業段々盛大ニ赴ケリ若

シ今日戦端ニ至テハ一万里程ノ地ハ首尾此ニ由
テ結合ス。事物ノ情勢其レ斯ノ如シ是レ臣カ此約定
ニ於テ之レヲ拒ムノ第。三ナリ
支那ノ屬地ハ總テ内外蒙古ノ間ニ散在シ。遼望数千星ノ
沙漠アリテ露人ト隔絶ス。露人若シ此国境ヨリ侵入セン
ト欲セハ此北方ニ於テ險阻艱難ヲ發見スヘシ。抑モ露人
ノ蒙古ニ於ケル馭路ノ脚夫ハ蒙古人ナリ。非常ノ大事
於テ露人脚夫ニ多ク其賃銀ヲ与ヘハ露國ト蒙古トノ間
一日ニ其事ヲ通達スルヲ得ヘシ。其陸軍ノ兵食器械ノ運
輸ニ於テモ更ニ梗塞不便ノ事ナカルヘシ。然リ而シテ我
屬地ハ為ニ煽動サレテ其進軍ノ教導ヲ為スニ至ルハ論
ヲ待タサルナリ。是レ臣カ此ノ約定ニ於テ之レヲ拒ムノ
第。四ナリ

此約定ニ於テ露人ニ許スニ國境ノ関門三十六ヶ所ニ經
過スルヲ以テス。是レ平和ノ時ニ在テ商人ノ為ト云フト
雖レ甚タ長キニ過キタル線路ニアラスヤ。是レ露人ノ我
ヲ愚弄セントスルノ徴ヲ表スルモノニシテ此レカ約ヲ
為スノ人ハ亦タ嘲笑スヘキモノニ非ラスヤ。一端大事変
ノ時ニ当リテ三軍是レヨリ侵入スヘシ。何ヲ以テカ我國
ヲ防カシ。是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第。五ナリ
高賈タルモノハ抑モ兵器ヲ携フルノ權アルナシ。此權ア
ルハ商賈ニ非サルナリ。今ヤ何ノ理由モナク高賈各自ニ
兵器ヲ携帶スルノ權ヲ付与セリ。是レ果シテ何等ノ意ニ
出ツル乎。若シ一端此ノ數千方ノ一郡不意ニ我國境ヲ踰
テ來ルアリ。如何ニシテ其軍人ト商賈トヲ區別スルヲ
得シ。是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第。六ナリ

各事ニ於ケルニテ、其ノ課税ノ事ニ於テモ猶ホ又タ露人狡
猾ニ其拂ヲ望ムト欲ス露人此願望ヲ達セハ他ノ外國
人モ亦タ同様批准ヲ得ルヲ望ムカラス然
ラ、則チ漢口ノ稅額ハ漸々年ヲ逐テ數百萬ヲ減スハシ
是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第ナリ

同治三年(一千八百六十四年)乃至五年ニ於テ縱ニ新疆ノ
國境ヲ限界セシモ彼レ好テ其居ヲ我國ニ占メ而シテ我
カ八個ノ市府(カスガルカ、ラシヤルグツキ、アックス、フ
ン、バミ、ウス、ヤルカンド)ノ南北ヲ隔絶ス故ニ新疆ノ現
實ノ状態ヲ觀察スルニ其南部ハ隆盛ニシテ人口繁殖ス
レ、北部分ハ寂寥トシテ人口減少セリ支那ハ今ヤ石田磽
地ヲ得テ之レニ代フルニ行沃豊饒ノ地ヲ以テ与ヘサル
ヘカラス是レ全ク虚榮ノ為ニ實害ヲ蒙ルモノト云フ

ベキナリ是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒絕スルノ第ナリ

伊犁タルバガタイ「コーブツウリアスタイ」カスガル「ウル
ムチ」グツキ「チユルフアン」ハミ及ヒ此他「キンツクワシ
ノ背後ニ於ケル總テノ場所ニ領事館設立ヲ許可セサル
ハカラス然ラハ則チ此西方ノ市府近傍ハ盡ク其支配管
轄ノ下ニアルヘシ外國官吏ノ住在スレバ從テ外國風ノ
建築ヲ起スヘシ若シ建築落成セハ其保護ノ為ニ外國ノ
軍人ヲ屯集スヘシ故ニ從來我國ノ掌握セシ権力ハ直ニ
剥奪セラレテ我ハ容トナリ彼ハ主トナリ主客其勢ヲ換
フルニ至ルヘシ即チ我ハ此所ニ於テ不司テ欠キ
タレ、彼ハ甘「コ」ヲ置クヘシ又タ我ハ番兵ヲ有セザレ
バ、彼ハ番兵ヲ置クヘシ自餘ノ外國ト取結タル約定ニ憑

レハ外國ノ領事ハ國ノ中心ヨリ最モ遠隔シタル海岸
ニ於テ設立スルニ許可スルモトス若シ今日露國此事ニ
付テ先鞭ヲ付テ終テ我カ國境内ニル「ウリアンタイ」「コー
グ」「ウルムチ」「バミ」及ヒ「キヤユ」ニ於テ其領事館
ヲ設立セハ他ノ外國モ又悉ク此約定ノ歎条ニ由テ其利
ヲ得ンコトヲ欲スヘシ然ラハ則チ支那十八省ノ内滿地外
國官吏ノ充塞スル所トナルヘシ是レ臣カ此約定ニ於テ
コレヲ拒ムノ第九ナリ
露ハ伊犁ノ四分ノ三ヲ返付ス此山ノ山脊ヨリ此路ノ背
後ニ於ケル露ノ殖民ハ從前ノ如クニ留存ス是レ彼ニ支
配ノ權ヲ與フルナリ彼レ其砦堡ニ由テ我ヲ拒シ我ヲ遮
断スルナリ彼レ「コーエル」河ノ西部及ヒ「コーエルマ
ントウ」ノ北部ヲ分割シテ我ニ歸スルカ如クナレバ是ニ

我レハ耕作牧畜シ國益トナルヘキ一新地ヲ得サルナリ
「キンチンシ」^{名地}ニ於テ露人旧來其貿易館ヲ有シタリ現今
結締シタル約定ニ從ハハ此州郡ハ露ニ付與セリ再ヒ支
那ニ歸ラサルヘシ「キンチンシ」ハ唯タ彈丸黒子ノ一小也
ニ過キカレバ然レバ此路「タル」ヤヨリアクス及「カスガ
ハ」^ハ邊ノ路ノ東部ハ露國ノ州郡ニ連ナル咽喉ナレハ此ヲ
拒シテ我カ出路ヲ遮隔スベシ故ニ我國ニ屬シテ殘留ス
ル僅カノ人民ハ移住シテ終ニ我ハ人民ノ隻影ヲモ見サ
ルヘシ我ハ我カ人民ナク伊犁ノ出路ナク一片ノ利益ナ
キ土地ノ返却ヲ得テ之レニ代フルニ最要ナル金ノ一百
八十万「テール」ヲ擲棄シタリ此ニ地ハ果シテ何等ノ用
ヲ為ス乎是レ臣カ此約定ニ於テ之レヲ拒ムノ第十ナリ
露國ノ要請ハル所、最モ貪欲ニシテ豺狼厭ナキノ求メ

ナリ而ルニ崇厚無学無術狂惑シテ是レト約定ヲ締結セ
此ニ於テ六后王帝陛下赫トシテ崇厚カ僭横ヲ怒リ其
全權公使ノ職ヲ免シ他人ヲシテ是レニ代ラシメ玉ヒ而
シテ公明正大ノ義ニ基キ大會議ヲ開キ玉ヘリ皇帝陛下
内閣大臣モ公侯モ總理衙門ノ諸卿及ヒ此帝國ノ各部
ニ於ケル数百ノ官吏モ一言之レヲ括スレハ我カ全國ノ
人民ヲ舉テ悉ク此ノ約定ハ許スヘカラサルヲ充分知リ
リ而シテ或ハ此約定ヲ改正スルヲ付テハ其一端結
締セシモノナルカ故ニ今マ之ヲ改變セハ其成果如何
ヲ空想シ何等ノ慘狀困難ヲ兩國間ニ生スルアラニ乎ト
危懼スルモノアルヘケレ臣敢テ之レヲ以テ天下ノ公
議世間ノ輿論ナリト謂ハサルナリ臣竊ニ考フルニ此ノ
如キノ空想ハ固ヨリ無根ノ妄想ニ過キサルナリ抑々此

九
藏
卷

約定ハ一切将来ノ困難葛藤ニ拘ハラス變更セサルカ
ラス若シ我輩此約定ヲ變更スル能ハスンハ我輩何ヲ以
テ國民ト称スルヲ得ン
此約定變更ニ就テ切ニ臣カ請願スル所。上聞ニ達ゼン
トヲ熱望スルカ故ニ其請願ニ就テ最要ノ理由四ヶ條ア
ル第一條ハ必要決行第二條ハ大。声第三條ハ推理第四條
ハ施行スヘキ方法是レナリ
何ニカ必要決行ト云フ夫レ此結締セシ約定ハ悉ク我カ
推理ニ於テ凌辱ヲ受ケサルハナシ使節此ノ約定ヲ為セ
シナル政府ハ之レヲ拒ミタリ是レ崇厚カ所為帝國ノ宗
ヲ来シ敵ノ利ヲ生スルモノナリ自家ノ所存及ヒ自己
ノ責任ヲ以テ悉ク歸國マシカ故ニ統テ我カ全國ノ人民
ニ刑法局ニ渡サレナルヘカラサルヲ請求セリ且ツ使

其ノ罪コレヨ法律ニ從テ處分セサルヘカラサルヲ請
ミセリ猶ホ又タ其ノ口ヲ鎖鑰セシムル
ヘカラサルヲ請求シ因ニ崇厚ノ死刑ニ處センコトヲ要
セリ萬國公法ニ從カヘハ皇帝ノ命令ヲ凌辱シタル獨好
ハ皇帝陛下ノ權ニ越ユルトシテ之レヲ論ス而シテ總テ
斯ノ如キ使節ノ權ハ政府ノ指揮ニ由ルモノナリ崇厚カ
罪ハ則テ其密旨内諭及テ皇帝ノ聖旨ナリトセシ所ノ輕
忽ナリ崇厚カ事ハキトイシテ入牢セシモノニ同様ナリ
其終局ノ裁決分明ナリ臣故ニ口ク崇厚ヲ死刑ニ處スヘ
シト是レ此レヲ必要決行ト云フ
何ヲカ大声ト云フ夫レ露人我カ無学無術ナル使節ヲ凌
辱シ迫テ其花押ヲ捺セシメ露國ノ費シタル一ペニノ
代リニ數百封度ノ償却ヲ要セリ而シテ猶ホ厭カザナ

リ露ハ一大帝國ナリト雖モ其處分ニ付テハ廉耻ナルモ
ノアリテ天地ノ間ニ存在スルヲ知ラサルヘカラス縱ヒ
露カ狂暴ニ支那ヲ煽動スルモ然モ世界ノ各國ハ我ヲ扶
クルモノナリ北京駐在ノ露國公使ハ此約定ノ完全結局
ヲ待タス露國ニ引揚クルノ虚勢ヲナセリ然レモ斯ノ如
キノ風儀ハ他ノ外國ニ於テモ猶ホ有ルコトナキナリ猶ホ
又タ「コヤンダー」氏(北京駐在ノ露國公使)ニ唯々代理公使ニ過キナ
ルナリ其自家ノ所存及ビ自己ノ責任ニ由テ何ソ恣ニ
尋問スルヲ得シヤ是レ虚勢ニ外ナラサルヤ明ラカナリ
彼レハ随意ニ去留ヲ放任セヨ固ヨリ之レニ関涉高議
ルヲ須ヒタルコト方今採用スハ最良法ハ皇帝ノ勅諭
ニ明ラカニ露國ノ不正ヲ記述シ又タ人民及ビ官
此約定ニ異論ヲ入ルルノ理由ヲ表示シ此ノ勅諭

支那内外ニ週達セシメ且ツ総テ他ノ強國ヲシテ我
非ナルヲ列大セシメヨ又々我政府ハ新
聞紙上ニ於テ我等カ露國ニ向テ
ハ露國ニ服従ヘルノ道全ク尽キタルヲ公告シ且ツ國境
ニ在ル高官ニ報シテ人民ノ怒ニ後テ已ムヲ得ス兵ヲ起
ス義ニ基テ軍備ヲ為サシムヘキモノ是ナリ蓋シ支那
人民ハ始終ノ服従ニ由テ疲耗セルカ故ニ最早今後ハ
從セサラント決心セリ縱セ露ハ大國ナリト虫虺曩ニ土
兎其ト交戦セシ以來ハ徒ニ衰殘ノ兵卒ノミヲ存シテ資
金ニ欠乏セリ其政府ノ施政者ハ黨派分離シ人民ハ激怒
シテ近年頻ニ皇帝ニ向テ暗殺ヲ試ミタリ露帝今更ニ
我カ交誼ヲ卻ケ我ヲ敵視シテ攻撃スルニ至ラハ本國ノ
人民其虚ニ乘シ咆哮トシテ群起シ帝室自家ニ於テ破裂

ノ生スルハ疑ヲ容サルナリ而シテ帝モ亦々終ニ從ハ
サルヲ得サルニ至ルヘシ何ノ違アリテカ他國人民ノ事
務ヲ顧ミルニ違アランヤ此事ヲ遠近ニ傳達スル是レ臣
カ大声ト称スル所以ナリ
何ヲカ權理ト云フ夫レ伊犁ノ一件ニ付テ大ナル賜与物
ヲ生出セリ此ノ約定ニ於テ支那カ受ル所ノモノハ唯々
伊犁ト伊犁トノ二字ノ空名ノミ而レテ此ノ代リニ支那ノ
棄レシハ新疆二万里ノ現地ナリ加之ナラス土地ヲ耕作
ニ方府ヲ建築シ斯ノ遠隔ノ地ニ番兵ヲ置クノ費用ノ為
ニ毎ク四十テール乃至五十テールヲ拂ハサルハカ
新疆ヲ守ル所ハ所有セザルニシテ好シテ伊犁ノ所有
ルヲ欲セハ約ハニ新ニシタルハカラス其非難ノ多
ク我ニ在リ伊犁ヲ回復スルモ亦々失策ナリ然レモ

ハ彼レト具其策分シモノナリ綴ヒ使節カ此約定ヲ
印シタルモ未_レ皇帝_ノ批准セシモノ言フヘカラサ_レリ此故ニ約定スル_レ未_レ
批准セシモノ言フヘカラサ_レリ此故ニ約定スル_レ未_レ
方_ニ儀牲ノ血ヲ絞ルニ非サレハ夫ノ結締シタル約定
其効ナカルヘシ是レ猶ホ陳古ノ書ニ記載スルモノト
一故ナリ露人綴ヒ道理ヲ知ラス論理ニ暗キモ此ノ論ヲ
以テ過ト為ス能ハサルヘシ此故ニ總テ我輩ノ伊犁ニ
ケル下條ノ請願ハ唯々伊犁ニ於ケル我國ノ權理ヲ増ス
ノミ
何ヲカ方_ヲ法ト云フ夫レ露人我國ニ其真實ヲ表センニハ
其陸軍ノ舉動ヲ停止スベシ然レモ露國カ正理ヲ凌キ公
法ヲ破リ我國ノ友誼ヲ棄却センニハ其兵ヲ出スハ三道
ニ分レテ進ムナルベシ一ハ新疆ニハ吉林三ハ天津是ナ

リ
左曾棠_{名ハ}教度ノ戰場ニ勝利ヲ得タル良將ナリ其次ハ
金順、劉錦棠、錫綸、張曜等皆ナ猛將ナリ我レ此勁兵ヲ以テ
露ノ長驅シタル勞兵ニ當ラハ之レヲ敗ラン一期ニテ待
ツヘキナリ_{ラマス}及ヒ_ドジヤサツク_地ト連合セハ露軍
ノ歸路ヲ断ツヲ得_レ然ラハ則チ露ノ軍馬瀕_ニ其
國ニ歸リ得サルヘシ
露兵吉林ヨリ侵入セハ國境甚々遠シ且ツ深樹密林甚々
多シナリ此地ヨリ露ノ首府ニ至ルマテニ万里以上ノ距
離_ニ懸軍能ク深入スルモ兵食ノ給用運輸甚々容易
ラサル_ニ而レテ我カ陸軍ノ_モ守ルモノ甚々健ナ
ス故ニ特ニ_文兼併_ノ將校ヲ撰舉シ此レニ任スル
特別ノ大權ヲ付_ケルヘカラス且ツ其守兵ノ為ニ

ハノ軍資ヲ備ヘサルベカラス、南北海ノ軍隊其一半ハ東
一ノ國ヲ鎮セシモ其旨ハ口トモノハ能ク其任一當レ
入ヲ撰ハサルヘカラス即チ左管名及ヒ金順等ヲ東三
ヶ國名為ニ「チーリー」名地ノ驍勇ナル諸將校中ヨリ分啓
ヲ之レカ指令官メラシメ任所ニ在テ命令約束ヲ待タシ
メドルヘカラス素倫及ヒ「ハツレン」名地ノ屠者ハ概シテ其
性武ヲ好ミ勇剛ニシテ既ニ露人ト争闘ニ習慣スルカヤ
ニ共ニ召集シテ軍陣ノ事ヲ演習熟練セシメハ必勝疑ヲ
容レサルナリ然リト雖モ若シ一、時利アラズンハ一二ケ
月堅ク守テ出ツル勿レ然ラハ則チ露人撃スシテ自カラ
敗走スヘシ
縦ニ天津ハ北京ニ近接ストイヘ凡然レモ露ノ軍艦ノ進
入スルハ英佛ノ許サハル所ナルヘシ且ツ萬國公法ニ從

ハハ露ハ蘇士渠ヲ過クルヲ得サルカ故ニ已ムヲ得ニ其
軍隊ヲ送ルニ商船ヲ以テスヘシ然レモ此等ノ商船ハ歐
洲鎗甲艦ノ比ニ非ラサルナリ
李鴻章ノ説ヲ聞クニ曰ク支那ハ其本分ヲ尽スヘキナリ
露國トノ戦争ニ於テ孤立スルヲ恐ルヘカラスナリ急
ニ精撰ノ兵ヲシテ器械ニ熟セシムヘシ、而シテ堡砦ノ築
クハ極ク新法ノ日耳曼式ニ從テ建築スヘシ若シ我國ノ
戦争ニ於テ勝利ヲ得ルニ至ラハ其功ヲ賞スルニ公伯ノ
爵ヲ以テスヘシ若シ勝ヲ得サラハ軍人ヲ罰スルニ嚴法
ヲ以テスヘシ伊犁ノ償金トシテ二百八十万「テール」名ハ
ノ代リ、金銀ヲ以テ歐洲ノ貨ニテ暮リ我カ為ニ戦ハ
ルヘシ露人ハ折屈サズ國疆ニ侵入シ而シテ「ホ」名
地ヲ吞ムテ「ラン」名其目的ハ此進路ニ由テ相結合シテ

ノ背後ニ於ケル線路ノ有セント欲ス蓋シ是レ又々注
シク憂患ナリト云ヘリ
李鴻章其詞公使ニ説クニ破テリ寒シノ意ヲ以テセハ
(即チソレ外國ノ國カ露人ノ手ニ落ツルニ至ラハ英國以
テ獨リ全ク得ンヤト云フ意ナリ)英公使此説ヲ容レ並ニ
又々此相互ノ敵ヲ憎怨スヘシ「ペン、ユ、リン、ヤン、ヨ、ロ、
ン」^{「ポー、チヨ、リ、ユ、ミ、ン、チヤン、サン、カイ、チエン、ユ、}
^{ン」}「カウ、スン、リン、スン、ホン」^{「ソウ、チヤン、パン、ツ、ハン、}
[」]「ポー、チヤン」^{「ツ、ア、ケ、シ、ヤン、リ、ヤン、リン、チエン、ク、}
[」]「ジ、ユ、イ」^(以上人名)等ノ如キ或ハ今マ現職ニ在リ或ハ賜金ヲ
辱フシテ退隱スルアリ然レモ齊レク是レ近年有名ノ諸
將ナリ皇帝ノ上諭ヲ以テ此將校ヲ北京ニ召集シ奇策良
法ヲ議セシムベシ然リ而シテ彼等ヲ北京或ハ「ツ、ン、ヤ

ン」^{地名}或ハ天津或ハ「タ、ク」^{地名}或ハ東三ヶ國ニ分鎮セシムハ
シ然ラハ則チ戦争破裂ノ時ニ至テ各地ノ軍備整肅ナル
ベシ此ノ將校ハ猶ホ山中ニ猛虎ノアリテ人民ノ恐怖ス
ル所トナルト一般ニ以テ露人ノ狂暴ヲ制スルニ足ルヘ
シ是レ即チ臣カ所謂ル方法ナリ
臣雖ニ經驗ニ乏シキニ敢テ卑説ヲ陳ス臣ハ唯々我國孤
立ノ情勢ニ於テ自カラ覺知スル所ノ利害ノ深淺ヲ陳
スルモノナリ、明カニ世衰ヲ觀察スルニ歐人ノ為ニ我カ
權ヲ掠奪セラレ又々日本人ノ為ニ我州郡ノ諸部ニ無
セラ、彼ニ依セラレントスルノ艱難ニ逢過レ又々
人ノ為ニ葛藤困難日ニ輻差シ其ノ止スル所ヲ知ラサル
今日ニ於テ猶ホ我國史ニ其受辱ヲ受ケ之レニ服従
ハ支那ノ國威全ク之ニ落ケ自跡ノ外國拳ヲ我回ヲ履

一 此時ヨリ始マレシ其外制ノ壓制ヲ受テハ其成
如何又々外國ノ壓制ヲ受テサレハ其成果如何今日成
外國ニ照從セスレテ其如何ノ果ヲ来メスモ果シテ
何ニカアレン、我國唯々露國ニ抗抵ヲ為サレ(露國ト戰爭)
ニ於テ繼然是レ迄ノ勝利ハ我國ニ在リシカレ戦争ハ天
運トレハ其勝敗如何アルヤ必勝ヲ期スベカラサルモ勝
敗ハ敢テ論セサル所ナリ

臣竊ニ考フルニ露人其兵ヲ起スニ當テ嘉峪関ヲ踰ユ
ル能ハサルヘシ縱ニ其勝利ヲ得ルモニ、ク、タ、地ニ
近寄ル能ハサルベキカ故ニ我ヲ害スル甚シキニ至ラサ
ルヘシ其進軍ノ日數ヲ要スヘシ而シテ彼レ其陣營ノ所
在ニ於テ兵糧ヲ取ルノ地ナカルヘキカ故ニ其強カモ挫
折萎靡スルニ至ルヘシ然ラハ則チ恐ルヘキモノハ果シ

テ何モノ乎今ヤ支那ノ強弱ヲ試ミ且ツ其勁兵智將ナキ
乎否ラサル乎ヲ確証スルノ秋ナリ即チ支那ノ浮沈隆替
ヲ証スルノ秋ナリ方今廟堂良宰アリ而シテ猛將雲ノ如
シ以テ戰フヘキノ秋ナリ若シ今ヨリ更ニ數年ヲ經過セ
ハ左曾棠猶ホ生存スルモ衰老ニ及フヘシ李鴻章衰ハス
ト雖モ老ユベシ而シテ智士猛將モ亦々漸ク逐テ世ニ去
ラントス武ヲ好ムノ氣象蔚然タルノ時ニ於テ猶ホ且ソ
関クハ容易ナラサルニ況ンヤ然ラサルノ時運ニ於テヲ
ヤ東ハ既ニ東方ニ市府ヲ関キ其西方ニ兵隊ヲ置テ之レ
ヲ守リ其北方ニ貿易ノ建物ヲ置キ而シテ上下左右比テ
其住宅ナリ、且ツ万里ノ長城ノ前ニ各大道及ヒ朝鮮
亟ク危懼ヲ抱クニ至ヒテ
今ヤ我輩露人ヨリ遠隔ニ地ニアテテ露人ト分別スルカ

故ニ我輩自カテ防禦スルヲ得ヘシ然レモ一端露人我カ
 ハ堂ヲ襲フニ至ラハ可ヲ以テカ之ヲ防カン臍ヲ噬ムル
 及ハサルニ至レ、衆々此約定變更ノ言ニ高議ヲ為スノ間ト
 雖モ武備ヲ嚴ニスルハ今時ノ最要ナリ況ンヤ此約定
 変更ヲ得サルニ於テヲヤ、伊犁一件ノ談判完全セサル間
 ニ彼レヲシテ怠慢ナラシメ而シテ我軍備ノ整フヲ得ハ
 シ然レモ崇厚ハ死刑ニ處セラルヘシ此約定ノ変更セ
 場合ニ於ケルモ亦タ之レヲ斬ラサルヘカラス又々此約
 定ノ変更セサル場合ニ於ケルモ同様ナルヘシ是レ臣カ
 私意ニ非ラス天下ノ公議世間ノ輿論ナリ
 政府ニ於テ皇帝陛下ヲ輔佐スルハ総テ權官ノ職分ナリ
 是ニ諸有司ノ職分ナリ成規ニ依テ露國トノ談判ハ總理
 衙門ノ掌任スル所トナラサルヘカラス然レモ其決、太

右皇帝陛下ノ聖裁ヲ仰カサルヘカラサルナリ
 此議論ハ我國ニ於テ重大ノ關係ヲ有スルカ故ニ臣黙止
 傍觀ニ付スル能ハス敢テ一言セサルヲ得サルナリ臣故
 ニ仰キ願フハ江海ノ聖恩ヲ岳サセ玉ヒ此歎願ヲ廟堂高
 官ノ議ニ下タシ廟堂諸賢ヲシテ臣カ悲憤歎願ノ意ヲ商
 量セシメ玉ハシテ皇帝陛下此歎願ニ於テ聖覽ヲ垂レ
 玉ハ、幸甚

露清條約

第一條 露國ハ清國ノ請求ニ應ジ伊犁回復ノ事ヲ承諾ス

第二條 清國ハ伊犁住民ノ犯罪者赦免ノ儀ヲ承諾ス

第三條 伊犁住民ノ露領ハ移住シタル者ハ露國人民ト同等ノ取扱ヲ受ケ且ツ同等ノ權利ヲ有スベシ

第四條 是マデ伊犁ニハケル露民ニ屬セル財産ハ將來トテモ其所有者ニ屬スベシ

第五條 伊犁引渡ノ談判ハ清國ノ方ニテハ清廷ノ特命ヲ受ケタル左曾棠外数名露國ノ方ニ於テハ其特命委任ヲ受ケタル將軍コロフマン之レヲ履行スベシ

第六條 清國ハ伊犁回復ノ爲ニ五百萬「ルーブル」ノ金ヲ露國ニ償フ「テ」許諾スベシ此金ハ條約本書交換スルノ時ヨリ一ケ年間ニ寄濟スベキモノトス

第七條 清國ハ伊犁ヲ回復スルヲ以テエコシ河ノ西及ビ
天山ノ南ヨリテケス河一帯ルノ地ヲ露國ハ讓與スベ
キモノトス

第八條 タチエン(タシケンド坎)國境ヲ改定スベキヲ議定
ス

第九條 特命委員ニ於テ國境ヲ改定シタルノ後々ハ其界
標ヲ建立スベシ

第十條 喀什噶爾并ニ庫倫ノ舊條約ニ因テ建設シタル各
領事館ノ外ニ嘉峪関、ウコー、哈密、タルフハン、烏魯木齊
及ビクチエノ各所ヘ更ニ領事館ヲ建設スベシ

第十一條 領事及ビ地方官ハ其職務ニ関スル事件ヲ商議
スルニ當リテハ互ニ往復ニ文書ノ禮ヲ以テスベシ且
ツ慣例ニ依リ賓客ノ禮ヲ以テ領事ヲ過スベシ

第十二條 蒙古ヲ始メ天山南路及ヒ天山北路各地ニ在ル
露商ノ商貨ハ悉ク無税タルベシ

第十三條 商貨ノ藏庫ハ領事廳ノ在ル各地及張家口ニ設
クベシ

第十四條 露商ハトンチヨウ、西安府及ハンチヨンヲ經テ
張家口、嘉峪関、天津、漢口ノ各地ヘ及ビ其各地ヨリ貨物
ヲ運輸スルヲ得且ツ清國ノ物産ヲ露國ヘ運輸スル
モ亦同地ノ通路ニ就クベシ

第十五條 此條約ハ皇帝批准ノ後五ケ年ヲ經ザレバ改正
若クハ變更ヲ行フ可カラス

第十六條 粗茶課税ノ儀ニ付キ露商ヨリ願望ノ次第ハ總
理衙門ニ於テ之ヲ決定スベシ

第十七條 各地方官ハ従前ノ條約ニ於ケル如ク國境外ヘ

逃遁スル家畜ヲ搜索スベシト虽モ其損亡ノ為メニハ

費額ヲ出サバブルモノトス

第十八條此條約ノ本書ハ此條約ヲ結ビ之ニ帝璽ヲ鈐セ
ラル、ノ後チ一ケ年中ニ露京ニ於テ之ヲ交換スル